

東京女子大学理事長 原田明夫様

CC 東京女子大学学長 湊 晶子様
同 常務理事 堀地史郎様

6月13日付のお手紙を拝読しました。「これ以上、議論をしても平行線は交わることはないと考えざるを得ません」とのことで、「原案通り」の実施を通告されました。これまでのお願い等が、少数者の申し出だとお取りになったかもしれませんが、私どもは単なる感傷や愛着ではなく、未来に及ぶ東京女子大学の基幹にかかわる問題として、真剣に考えております。感覚的だと斥けられそうですが、象徴的な表現で申し上げれば、もしこの計画が実施されましたらA4判『東京女子大学の80年』の巻頭に見開きカラー写真で紹介されている、緑と青空をバックにした優美な本館の姿は、90周年記念事業の名の下に永遠に喪われることとなります。左奥に青空をさえぎって新しいビルがそびえ、均整の取れた景観が消えうせるからです。そのことを一度でも想像されましたでしょうか。

さて同じ『80年史』には、1919年に新校地に決った井荻に、学生が植樹に通ったという写真が出ております。まさに90年近い歳月を隔て、当時の学生が手塩にかけ、その後の学生たちの心を育てた豊かな自然と唯一無二の建物、それもキャンパスで最初に建てられた、創立者の理念と愛情のこもった美しい東寮と体育館を、90周年のお祝いのために、「土地に還元して」捧げるといふ、いかんとも形容しがたい発想と、それのもたらす厳しい現実には、私はただただ言葉を失っております。

歴史の浅いアメリカだからかもしれませんが、その文化・歴史に詳しい当会発起人の方が、開拓地で最初に建てられた建物は、たとえ藁葺小屋であっても大切に保存する、という共通理解があるのだと教えてくださいました。A.レーモンドの建築の中でも学生寮と体育館（別名社交館）は、異色の作品です。大学建築においても日本の「オンリー・ワン」の建造物です。合わせて女子の高等教育における記念碑的存在であることは申すまでもありません。他に類を見ない独自の資産として、また学生が創立の歴史を知るためのよすがとして貴重であり、校舎と比しても面積の大きさがその存在をきわだたせております。創立者がいかに力を入れていたかを、あらためてご想起いただきたいのです。

昨年7月のお呼び出しに始まって、お話にうかがってからはや1年になります。ご記憶かどうか、第1回正式面談（昨年11月）の冒頭に「私どもは争うために来たのではない」と申し上げ、祈りで始めましょうとご提案しました。その場に流れた一瞬の戸惑いを私は忘れておりません。あれはなぜだったのでしょうか。話し合いの細かい点は省きますが、その時から「三号館の改築こそ先に行うべきではないか」と申し上げ、今年1月になって実にあっさりと「三号館の建て替えによって東寮・体育館を残す」代替案を三菱地所設計に検討させるとのお約束をいただきました。整備計画はキャンパス全体のバランスを考えて総合的に考えた、とのお話でしたが、私どもが率直に眺めれば、戦後の建物で、雨漏りなど評判が悪く、薄暗い雰囲気三号館こそ、先生方のために新しくされるべきだと申し上げたはずです。

しかしその後の経過を見ますと、検討は言葉のみだったのでしょうか、はじめに解体ありきのように計画が推進され、微塵も変えないことを前提に話し合いに臨まれました。

三号館については常に言を左右され、変更「できない理由」をあげる、といった態のものでした。最後のお手紙（本年6月13日付）でも「学報（昨年7-8月合併号）発行時には三号館は解体の方針でしたが、その後整備計画を進める中で、用途は限定的になりますが、改修を行わずに活用の道も検討してみようということになっております」とあります。1年余前の計画決定が、このような、とりあえずの発想でなされ、「総合的な計画」といいながら、かなり曖昧な部分を残して、軸足の定まらないまま「原案通り実施」されようとしていることに驚かされます。私どもには、振り回された感が否めません。

そこで取立て付け加えれば、本館地下の荒れた元カフェテリア、その奥の空室、2階、3階の図書館跡の空間、それに続く広い事務室など、ずっと以前に一度だけ写真を拝借にうかがってその部屋の利用の仕方に驚いたことがありました。以前は学生の話し声や笑いが聞こえ、足早に行きかう活気にあふれた素敵な空間でした。今、人けのないガランとした場所を、もっと学生が利用できるようにすることが2棟を解体するより先決ではないか、そのための改修こそと考えます。目立ちませんが100周年事業の前にはしておくべきことがここにある、と個人的には強く思っています。

牟礼の売却金をビル建設等に使い、補修費等にもいくらか回して、さて100年にはどんな計画が予定されているのでしょうか。以前ある財界人から聞きましたが、牟礼売却の時期などからみて、あまり有利な取引ではなかったと、具体的な数字を挙げて指摘されました。過去の話ですから申しても仕方ないのですが、それだけに手許に入った資金は心して大切にお使いいただきたいと考えます。しかし解体費用と補修費用の比較検討もなされないままにされました。

ところで東京大学のように卒業生の経済力が平均以上で、人数も多い大学でさえ、100周年事業の資金を集めるうえでひとかたならぬご苦労があったと聞いております。東京女子大学においても、やがて訪れるその時に、真に意義ある事業を実施し、それを長く心にとどめるには、卒業生の協力が何よりも大切だと思われまます。今回の解体計画について一万一千もの署名や卒業生の六百人からの葉書による真摯なお願いに対し、何らのご見解も示されませんでした。そのことを私どもは甚だ遺憾に存じております。余計な老婆心かもしれませんが、100周年事業にはよほどの計画性がなければと案じております。

6月末に旧体育館で学生の音楽サークルのミニ演奏会があり、聴きにいきました。終わってから学生たちに「体育館が解体されるのをご存じ？」と聞きましたら、誰ひとり知りません。大学は複数の方法で知らせているとのご説明でしたが、情報は驚くほど浸透していません。同窓会総会に出た人でもそこで初めて知ったと言う方がおられました。これまでの広報の実効性が問われます。

「おおそ真なること」を教えられ、自分なりに教えに忠実に生きてきた者として、率直な意見と感想を申し上げました。原田様のお手紙への質問はまだ残ります。お尋ねの詳細はどうぞ別紙をご覧ください。ご回答を賜りたく存じます。

2007年7月9日

東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会
代表 藤原房子